



ベンゾジアゼピン系薬剤の連用による薬物依存について

催眠鎮静剤、抗不安薬、抗てんかん薬で使用されるベンゾジアゼピン受容体作動薬などの医薬品について、**承認用量の範囲内でも漫然とした継続投与により依存性が生じることがある**として、厚生労働省医薬・生活衛生局より通知があり、使用上の注意の改訂(裏面例参照)が行われました。

ベンゾジアゼピン依存とは？

ベンゾジアゼピン系薬剤の長期使用によって、服用を急に中止すると、症状の再燃や離脱症状がみられるために、容易に中断できずに依存状態になっていること



ベンゾジアゼピン系薬剤使用時には注意してください！！

- ◆不眠や不安等の目的で使用開始した場合には、漫然とした長期投与(6カ月以上は特に注意)を避け、継続する場合には治療上の必要性を検討すること。
- ◆連用中の投与量の急激な減量・中止により、離脱症状や原疾患の悪化を招くことがあるため、中止の際は漸減を行うなど慎重に行うこと(図1参照)。
- ◆統合失調症患者や高齢者に限らず、刺激興奮、錯乱等があらわれることがあるので十分観察を行うこと。

参考文献：じほう、東京、2003、pp. 207-222
薬生安発0321第2号。

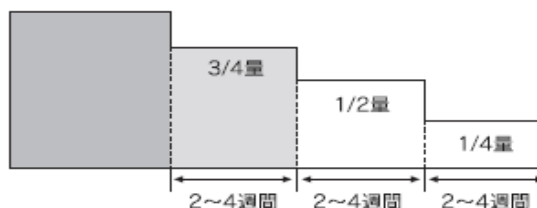
ベンゾジアゼピン系薬剤一覧(作用時間による分類)

睡眠薬		抗不安薬	
分類	一般名(主な商品名)	分類	一般名(主な商品名)
超短時間型	ゾルピデム(マイスリー)* エスゾピクロン(ルネスタ)* ゾピクロン(アモバン)* トリアゾラム(ハルシオン)	短時間型	エチゾラム(デパス) クロチアゼパム(リーゼ) フルタゾラム(コレミナール)
短時間型	ブロチゾラム(レンドルミン) リルマザホン(エバミール) ロルメタゼパム(リスミー)	中間型	アルプラゾラム (コンスタン、ソラナックス) フルジアゼパム(エリスパン) ブロマゼパム (レキソタン、セニラン) ロラゼパム(ワイパックス)
中間型	エスタゾラム(ユーロジン) ニトラゼパム(ベンザリン) ニメタゼパム(エリミン) フルニトラゼパム (ロヒプノール、サイレース)	長時間型	オキサゾラム(セレナール) クロキサゾラム(セパゾン) クロラゼブ酸二カリウム(メドドン) クロルジアゼポキシド(バランス) ジアゼパム(セルシン、ホリゾン) フルトプラゼパム(レスタス) メキサゾラム(メレックス) メダゼパム(レスミット) ロフラゼブ酸エチル(メイラックス)
長時間型	クアゼパム(ドラル) ハロキサゾラム(ソメリン) フルラゼパム(ダルメート)		

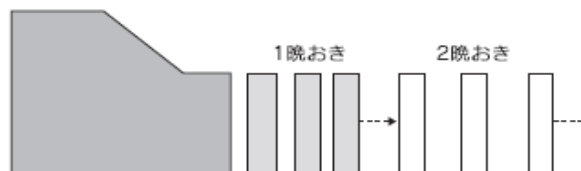
* 非ベンゾジアゼピン系薬剤であるが、ベンゾジアゼピン受容体を介して作用し、ベンゾジアゼピン系薬剤と同様の薬理作用を有する

（図1）【ベンジジアゼピン系薬剤の漸減・中断例】

漸減法（毎日の服薬を減らす方法）



確実法（服用の頻度を減らす方法）



（参考資料）ベンジジアゼピン系薬剤の使用上の注意改訂例

【医薬品名】アルプラゾラム、ロフラゼパ酸エチル

〔重要な基本的注意〕の項に

「連用により薬物依存を生じることがあるので、漫然とした継続投与による長期使用を避けること。本剤の投与を継続する場合には、治療上の必要性を十分に検討すること。」を追記

〔副作用〕の「重大な副作用」の項の依存性、離脱症状に関する記載を

「依存性、離脱症状：

連用により薬物依存を生じることがあるので、観察を十分に行い、用量及び使用期間に注意し慎重に投与すること。また、連用中における投与量の急激な減少ないし投与の中止により、痙攣発作、せん妄、振戦、不眠、不安、幻覚、妄想等の離脱症状があらわれることがあるので、投与を中止する場合には、徐々に減量するなど慎重に行うこと。」と改め、

刺激興奮、錯乱に関する記載を

「刺激興奮、錯乱：

刺激興奮、錯乱等があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。」と改める。

【医薬品名】トリアゾラム

〔重要な基本的注意〕の項の継続投与に関する記載を

「連用により薬物依存を生じることがあるので、漫然とした継続投与による長期使用を避けること。本剤の投与を継続する場合には、治療上の必要性を十分に検討すること。」と改め、

〔副作用〕の「重大な副作用」の項の薬物依存、離脱症状に関する記載を

「薬物依存、離脱症状：

連用により薬物依存を生じることがあるので、観察を十分に行い、用量及び使用期間に注意し慎重に投与すること。また、連用中における投与量の急激な減少ないし投与の中止により、痙攣発作、せん妄、振戦、不眠、不安、幻覚、妄想等の離脱症状があらわれることがあるので、投与を中止する場合には徐々に減量するなど慎重に行うこと。特に、痙攣の既往歴のある患者では注意して減量すること。」と改め、

精神症状に関する記載を

「精神症状：

刺激興奮、錯乱、攻撃性、夢遊症状、幻覚、妄想、激越等の精神症状があらわれることがあるので、患者の状態を十分観察し、異常が認められた場合には投与を中止すること。」と改める。